

残された福祉課題

「安全を守る」から  
「**尊厳**を守る」へ

木原 孝久

住民流福祉総合研究所

# はじめに

## (1)福祉関連の法律になぜ「尊厳」が登場するのか？

私たちの福祉は、一体どこへ向かっているのか。今の福祉がすでに完成体なのか。いや、そうではあるまい。もっとずっと先に、私たちが目指している理想の福祉があるはずだ。

それを私なりに追求していったら、あるキーワードに目が止まった。「尊厳」である。介護保険法や社会福祉法など、福祉関連の法律に目を通すと、そのいずれにも「尊厳」の文字が出てくる。なぜそんなにも「尊厳」にこだわるのか。

## (2)福祉という営み自体が当事者の尊厳を傷つける？

謎解きを始めて数か月、発見したのは、福祉という営み自体が、当事者の尊厳を傷つける張本人だということだった。

- ① 福祉というのは、要援護者を助けることだろう。しかし助けてもらう側からすれば、助けてもらうこと自体が、尊厳の危機なのだ。
- ② また、福祉が担い手主導で進められているのも問題だ。担い手のやり易いように効率化された福祉が行われているが、それもまた当事者の尊厳を傷つけている。対象者をひとまとめにして、十把一絡げのサービスを提供しようとする。ニーズは当事者1人ひとり異なるのに、それは無視される。粗雑な福祉になってしまう。
- ③ 担い手と受け手は、強者と弱者がストレートにぶつかるという格好になっている。こういう構図だと、担い手の横暴が必然的に発生する。これ

もまた尊厳の危機につながる。

## **(2)当事者の尊厳を守る福祉とは？**

本誌では、当事者の尊厳を守る福祉を2つの側面から取り上げた。1つは、担い手の都合でつくられた今の福祉を、当事者の都合に逆転させるとどうなるか。もう1つは、ずばり当事者の尊厳を守る福祉とはどういうものなのかということだ。

# 目次

## 〈第 1 章〉福祉はなぜ人間を粗雑に扱うのか？

1. 福祉関連法に「尊厳の保持」とあるのは、福祉が元々、当事者の尊厳を傷つけ易い営みであるからだろう。
2. 文明は人間を扱う場合にも効率ややり易さを重んじた。粗雑な福祉が生まれたのは必然だ。

## 〈第 2 章〉当事者の尊厳を守る福祉を、当事者主導で作り出そう

1. 今の福祉は担い手の都合でつくられている。これをすべて、受け手側に都合の良い福祉につくり直そう。
2. 受け手の都合で福祉をつくと、どうなる？
3. 受け手の願いをサービスや活動に盛り込ませる法。

## 〈第 3 章〉当事者の尊厳を傷つけない6つの方法

## 〈第 4 章〉尊厳を守る福祉を、当事者主導で実現させる法

## 〈第1章〉

# 福祉はなぜ、人間を 粗雑に扱うのか？

# 1.福祉関連法に「尊厳の保持」とあるのは、福祉が元々当事者の尊厳を傷つけ易いからではないのか？

## (1)主な福祉関連の法律には必ず登場する言葉

■介護保険法を見ていたら、「尊厳」という言葉に目が止まった。ついでに、ほかの福祉関連の法律も見てみると、やはり「尊厳」が入っていた。

■介護保険法では、「これらの者が尊厳を保持し」とある。社会福祉法では第3条に「福祉サービスは、個人の尊厳の保持を旨とし」。児童福祉法では、第2条に、「児童は、特別の保護を受け、また健全かつ正常な方法及び自由と尊厳の下で、身体的、知能的、道徳的、精神的及び社会的に成長することができるための機会及び便益を」とある。

## (2)福祉サービスは対象者の尊厳を傷つけやすい

■福祉サービスという行為が、対象者の尊厳を傷つけやすい傾向があるということではないのか。今までは、担い手は慈悲の心をもって相手に関わるから、尊厳を傷つけるようなことはすまいという前提に立って、福祉は行われていた。

■しかし時代は変わり、特別な関係者だけでなく、だれでもがこの行為をするようになると、そういう前提は崩れてしまった。建前ではこういうことは言わないが、本音の部分では、こんなストレートな表現になる。福祉サービスは、

ざっくばらんに言うと、強者が弱者に提供するものなのだ。

### **(3)絶対的権力は絶対的に腐敗する**

■今から数千年前、ローマの哲学者がこう言っていた。「絶対的権力は絶対的に腐敗する」。福祉の構図はまさにこれ、つまり「絶対的権力が絶対的弱者に関与すること」。それは絶対に腐敗すると言っているのだ。

■福祉の世界では、もともと思いやりのある人が関わるのだから「尊厳の危機」といったこととは無縁のように見えるが、現実はその逆だったのだ。福祉の世界だからこそ、人の尊厳が傷つけられやすいのである。福祉関連の法律にこれだけ「尊厳」の言葉が使われるのには、そういう事情があったのかもしれない。

### **(4)ストレートにあげれば、相手の尊厳がきずつく**

■文化人類学では、南太平洋に点在している島の集落の生活やアフリカの集落での人々の生活を調査対象にしている。その中にこんな事例があった。人が誰かに贈り物をあげようという場合、その人は、贈りたいものを神棚に乗せるのだ。神様にお返ししたのだから、もう私のものではない。それをだれが持って行っても、私には関係ないことだ—というのである。

■随分面倒くさいことをやるものだなと思うだろう。しかしそうでもしなければ、相手の尊厳を傷つけることになると考えたに違いないのだ。この文化に属する人々は昔から、人にもものを贈呈するとき、相手の尊厳を傷つけやすいと知っていたのだろう。ストレートにあげれば相手の尊厳が傷つくので、こんな方

法をとっていた。

■今の福祉関係者に限らず、一般住民も含めて、こんな繊細な配慮をするだろうか。あげたいなら、ストレートに「これ、あげる」と言えばいいではないかと思うだろう。そこには、相手の尊厳を傷つけないようにするという配慮が欠けているのだ。

## **(5)施設が入所者の尊厳を傷つけると理事長は知っていた？**

■介護保険関連のサービスには、老人ホームへの入所やデイサービスの利用がある。そこで介護のプロたちが活躍していて、ある介護士は、「我々こそが尊厳保持のプロフェッショナル」と言っていた。

■老人ホームの施設長をしている知人から、こんなショッキングな話を聞いた。理事長が高齢で弱ってきたので、「そろそろ先生のおつくりになった老人ホームに入りましょうか？」と進言したところ、先生は突然わっと泣き出して、「あそこに入れられるのだけは勘弁してくれ」と言ったという。何十という施設をつくり、福祉関係者では知らない人がいないくらいの超有名人だが、その施設がいかに入所者の尊厳を傷つけるものなのかを自ら証明したような話ではないか。

■今度はデイサービスセンター。ある社会福祉協議会のスタッフに聞いた。彼女の団体もデイサービスを持っているので、「あなたはそのデイサービスを利用する気はあるの？」と。すると彼女はギョツとした顔をして「いやだあ！」と叫び、他の社会福祉協議会のスタッフたちも、大笑い。デイサービスが利用者の尊厳を傷つけることを、まだ利用していないのにわかっていたのだ。



## 2.文明は人間を扱うのにも効率ややり易さを重んじた。粗雑な福祉が生まれたのは必然だ。

■今は文明社会。めざすは「アメニティ」（心地よさ）。一般に、「アメニティ」と言えば環境問題で使われる用語だが、これを拝借した。

■具体的には、効率的、合理的、手っ取り早い、簡便、扱い易い、シンプル、即効などが実現すれば、文明は発達したとみる。

### (1)担い手と受け手を分け、当事者を障害別に分け、そして集め、十把一絡げでサービス

■たしかに文明のお蔭で、私たちの生活は確実に便利になった。生活のあらゆる面で、効率的であるし、手っ取り早いし、簡便だし、扱い易い。

■ところがその進歩の条件を、モノを扱うのと同じように、人間を扱う福祉や教育にも適用してしまった。効率的な福祉、手っ取り早い福祉、簡便な福祉、扱い易い福祉、シンプルな福祉、すぐ効く福祉といったように。

■その際、福祉関係者は、以下のようなやり方を取り入れた。①担い手と受け手を分ける、②受け手を要援護や障害などの種類に応じて分ける、③まとめる、④集める、⑤十把ひとからげのサービス、⑥ニーズを（要援護者に諮らずに、担い手の側が）つくる。これで福祉はじつに効率的になったし、やり易くなっ

たはずだ。

## (2)十把一絡げのサービスでは、1人ひとり異なったニーズを持っている利用者の願いには応えられない。

■こういう扱いを受ける側になってみればすぐわかるはずだが、これは人間の尊厳を守るやり方ではない。効率とは、何かを処理するための方法を言うものであって、その対象が人になったとき、それをされる側からみれば、粗雑に扱われたと感じるはずなのだ。

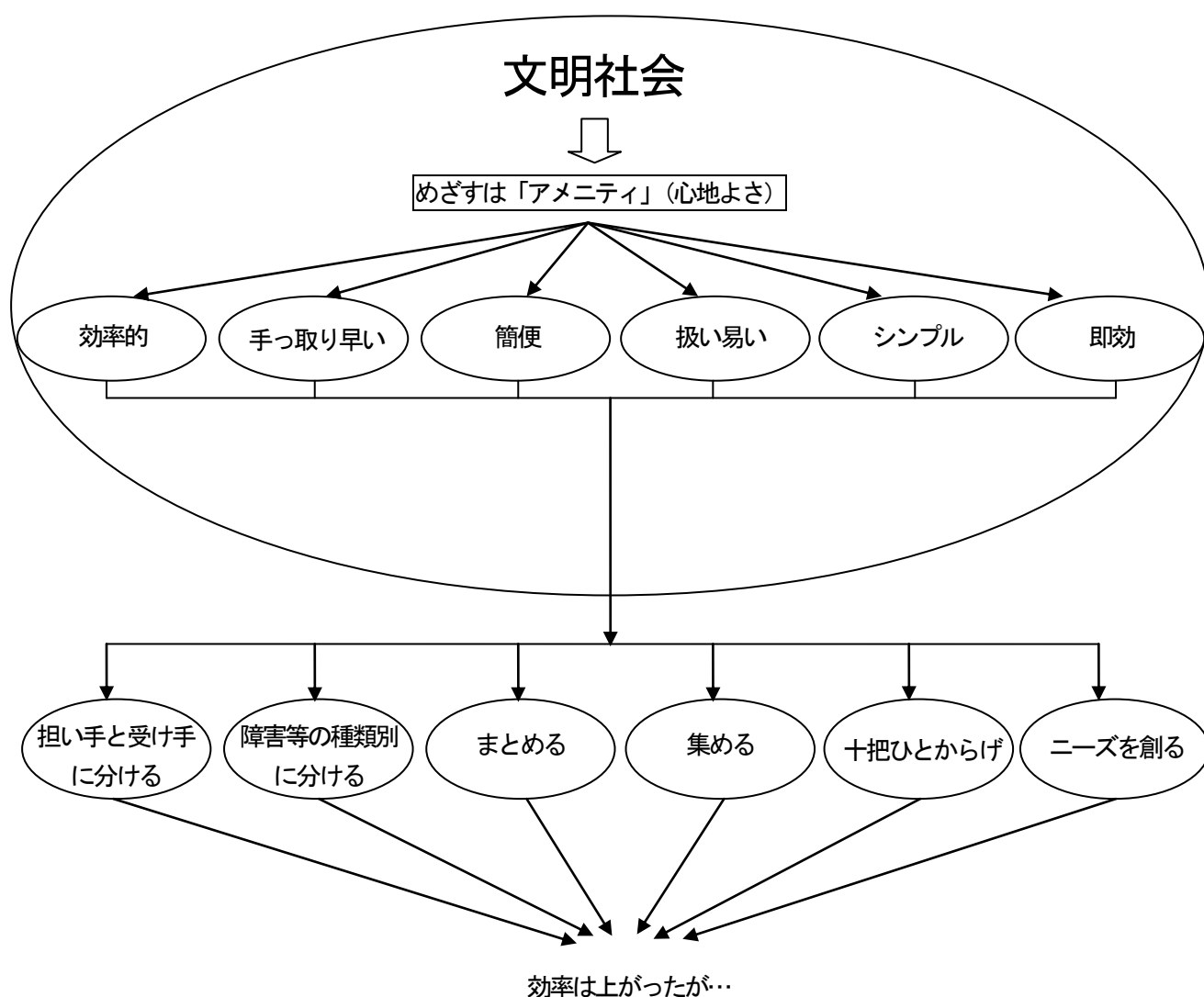
■人を集めて十把一絡げのサービスをすれば、効率がいいに決まっているのだが、1人ひとり異なるニーズにはほとんど応えられない。現代の文明がつくり出した様々な生活の用具を見れば、こんな素晴らしい文明がつくってくれるのだから、受け手にとってありがたいサービスになるはずだと期待するのも無理はない。

■はっきり言えば、①～⑥のやり方を導入したことで、本来あるべき福祉ではなくなった。それがこの文明の時代には、福祉関係者にはまともに見えてしまうこと自体に、今の事態の深刻さがあると言える。

## (3)「とりあえず命の保証はしてあげよう」

■それは、とにかく安全だけは保障しましょうという程度の福祉でしかない。とりあえずはこの程度の福祉をあげますが、それ以上は請け負えませんよ。命が惜しければ、見守りをしてあげましょう。食事が問題なら、食事を届けまし

よう。車がないなら移送サービスをしましょう。入浴が不便なら、デイサービスに来たら入れてあげます。その代わりに、個別の要求はしないでくださいね—  
ということだ。



■ 「デイサービスの車をわが家の前に横付けするのは、やめてほしい」という苦情が来るといふ。しかし効率をめざした福祉の担い手は、「そんな贅沢は言うものではない」とたしなめる。

■「見守りをしてくれているが、あの人は、私は苦手です。他の人に代えてください」などと言えば、「それではあなたの見守りはできませんよ」と叱られてしまう。効率を目指すのなら、誰には誰を差し向けると、こちらで機械的に決めていかないと駄目なのだ。

■要するに、最低限の福祉を提供するということだ。元々福祉はその程度のものでいいのではないか、という見方が住民だけでなく、福祉関係者全体の考え方にもある。

■災害が起きれば、〇〇小学校の体育館に集められる。北海道で地震が起きた時も同じだ。体験した人に聞くと、夜中になっても、誰かがおしゃべりをしている。子どもの泣き声が絶えない。外国人の集団が大きな声でしゃべっている。トイレはひどく汚れて紙が詰まり、水がトイレ中に広がっている。これはたまらんと、知人と一緒に別の避難所に逃げたという。

■これだけの文明社会で、人間の尊厳はどこへ行ってしまったのかとため息が出るが、その社会の皆が同じ扱いを受けていると、自分の尊厳が損なわれたとは思わないものなのだ。

#### (4)入所者への虐待はなぜなくなるのか？

■福祉や教育の現場では、効率福祉の副作用が生じている。高齢者や障害者の施設では、日常的に施設職員による入所者への虐待が行われている。それが時々新聞に載るが、本当にひどい話ばかりだ。排泄中の入所者を平手打ちしたり、同性同士でキスをさせたり、さらにそうした虐待行為を撮影して面白がるとい

った、人間の尊厳も何もないといった感じである。

■特別に邪悪な人間ばかりが職員として施設に集められたわけではないはずだ。おそらくはごく普通の人たちだ。それがどうしてあんな残酷なことを入所者にすることができるのか。関係者は、「一部の心ない職員のために、職員全体が悪い評判を立てられている」という言い方をするが、その見方は間違っている。

## (5)効率はいいが、人間をこうも邪悪にする

■ローマの哲学者が、既に紀元前に喝破していた話はすでに紹介した。「絶対的権力は絶対的に腐敗する」。超強者と超弱者を密室で対峙させれば、超強者は残酷になることもあるのだ。効率はいいが、人間をこうも邪悪にすることもある。

■だから文明の手法、効率とか手っ取り早さとかは、副作用を生む可能性もあるということを知っていなければならない。学校もしかり。これだけ日常的に、いじめや教師による虐待が起きるということは、子どもだけを集めて教室に詰め込み、地域の日も届かないというやり方に問題があったのだ。

## (6)効率のよい福祉には、手抜きの部分がある

■効率的な福祉で何が悪いのかと反論する人もいるだろう。しかし、そもそも効率的なやり方を求めること自体が問題なのだ。それは、担い手の側から福祉を見るということであり、それが取り組みのどこかに出てくるはずである。

■見守り活動を民生委員が一手に引き受けている地区がある。そこにいる十数軒の一人暮らし高齢者宅を1人で見守っている。しかし先日、数名の民生委員にこんな質問をぶつけてみた。「自宅の周りの何軒までなら様子が分かるか？」

と。すると全員が5本の指を上げた。5軒しかわからないということだ。それが妥当なところではないか。

■各家の状況は、その周りの数軒の人にしか分からない。向こう三軒で日常的に交流している中で、ようやく見えてくるのだ。

■となると、見守りというのは、本来は極めて非効率的な活動と言える。それなのに50軒を1人でこなすというのでは、異変に気付けるか疑わしい。そもそも無理があるのだ。本当に相手のことを考えるなら、その人のすぐまわりの5軒程度から、その家の事情をよく知っている人を見つけなければならない。

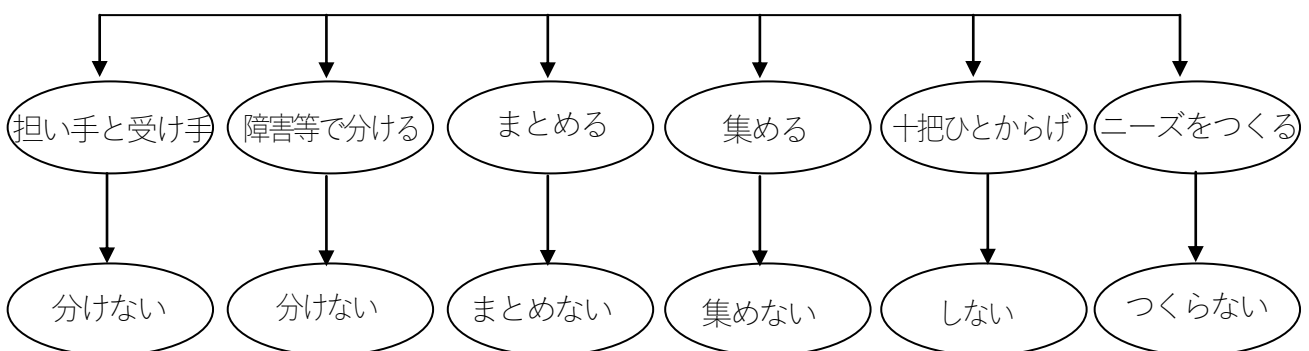
〈第2章〉

**当事者の尊厳を守る  
福祉を、  
当事者主導で  
作り出そう**

# 1.今の福祉は担い手の都合でつくられてある。これをすべて、受け手側に都合の良い福祉につくり直そう。

■今の福祉が文明の流儀に従って、効率や手っ取り早さなど、つまりやり易さを追求した結果として出来上がっていることに着目し、ではその効率や手っ取り早さによらない福祉のあり方はどんなものなのかを考えてみることにする。

## 効率の良いやり方を引っ繰り返すと



### (1)効率的な手法は、対象者の大事な尊厳を傷つける

■文明社会がめざしているのは「アメニティ」。このアメニティを実現するために、どういう要件を設定するか。これが12ページで「効率的」「手っ取り早い」などと書かれてある6つの項目である。これは社会一般の中で使われる方法だ。

■これらの方法が福祉の場面でどう実行されているかというのが、この図の上部の6項目である。担い手の福祉活動は、ほとんどこの方法で行われているは



ずだ。

■こうなると担い手にやり易い福祉が出来上がる。しかし対象者にとっては大事な尊厳が傷つけられる。

■そこでこのやり方を引っ繰り返してみたらどうか。当然、担い手には効率は悪くなる、手っ取り早くないし、やりにくいわけだ。しかし当事者にとっては有難い。上の図の下の欄である。

■担い手にとって都合の良いあり方から、受け手にとって都合の良いあり方に変える。つまり、当事者の側から福祉をつくり直すということだ。担い手を含めて、私たちのだれもがいつかは福祉の当事者になることを考えれば、それがあるべき姿ではないか。

当事者から見れば、

①受け手（対象者）に固定されるのではなく、私もできることで担い手になりたい。

②自分を障害や要介護度で分けてほしくない。

③ましてや細かく分けられた上で、まとめられたくない。

④プロも住民も、担い手はすぐに対象者を集めたるが、当事者は集められるのではなく、それぞれ自分のいる所で、自分の問題を解決してもらいたいと思う。

⑤十把ひとからげのサービスが多いが、本当は私のニーズは私だけの特異なものなのだ。それに丁寧に対応してほしい。

⑥ニーズは、当事者の私から生まれ、発信するものだ。担い手の側で一方的にニーズを推測してサービスにしないほしい。

## (2)「子ども食堂」を当事者の側からつくり直してみる

■まず項目立てから見ていこう。元になるのは効率を重視したやり方（担い手流）だ。推進者を決め、担い手と受け手を分け、受け手を更に障害や要介護などで分ける。そしてその分け方に従ってその人たちをまとめて、特定の場所に集め、そこで担い手が関わる。

■このやり方をすべて引っ繰り返したのが、次頁の中央の欄（受け手流）である。まず言えるのは、たとえば特定の場所にたくさんの親子を集めて食事を提供するという、効率流の人ならだれでも考えるやり方はとらない。

■具体的には、それぞれの親子が、地域の中から自分たちのニーズに対応してくれそうな人材を発掘して、その人と一緒に食事の問題に取り組むということになる。例えば同じシングルマザーで状況が似ている人や気が合う相手を選び、普段からさまざまな目的でおつき合いする。その中で、相手が作ってくれた食事をご馳走になるかもしれないし、その反対の場合もある。

■あるいは親と近居して、忙しいときは食事を作ってもらおうということもあるだろうし、食品・外食業界の知人などから協力を得られる人もいるだろう。

■そうすると、推進者は個々のシングルマザーについて、その人の人脈を把握して、その活用の仕方をアドバイスしてもいい。

■推進者ができることで、こういう方法もある。地域で支え合いマップを作り、さまざまな食事の資源を掘り起こし、その人たちとニーズを持った親子を、うまくつなげるという方法である。一人暮らしの高齢女性が、食事は作るけど、いつも1人では寂しい。たまには子どもと一緒に食事をしたいというのなら、

その人のニーズにピッタリの相手と結び付けばいい。これなら双方向だ。

## 「子ども食堂」を当事者に都合の良いやり方で

担い手流	受け手流	受け手流の具体的なやり方
① 担い手と受け手に分ける。担い手が主導	担い手と受け手に区分けしない。当事者が主導へ	それぞれが担い手にも受け手にもなっている。子どもが料理を作ってもいい
① 障害の種類や世代等で対象を分ける	対象毎に分けない	子どもに限定しない。中高生でも大人でもいい。高齢者が参加してもいい。
② 対象ごとにまとめる	まとめない。1人ひとりバラバラ	個々の親子が自分の見込んだ所でニーズを充足してもいい
④ 特定の場所に対象者を集める	集めない	個々の親子が各自、自分たちのニーズに合った資源の所で充足する
③ 担い手を発掘して研修	特別に担い手探しをしない	個々の親子が自分たちで資源を探す
⑥ 対象者にサービスする	一方的サービスにはしない	担い手と受け手が一緒に食事を作り、一緒に食べる
⑦ 活動の推進者を決める	推進者を特定しない	親子が集まり、共同で活動を企画する。一緒に作り、一緒に食べる

⑧十把ひとから げのサービス	1人ひとりのニーズに 合わせたサービス	それぞれの親子が各自で料理を作 る。又は各自が見込んだ資源の所で 食べる
-------------------	------------------------	--

## 2.受け手の都合で福祉をつくとどうなる か？

■今の福祉は一般的に、サービスを提供する担い手がやりやすいようにつ  
られているが、その逆の事例を拾い出してみよう。

### (1)「あなたは食べる人、私は作る人」ではない！

■会食会の現場であったこと。主催者が、「次回はマーボ豆腐ですよ」。すると  
参加者の1人が、「私、マーボ豆腐を作りたい」。もう1人が「俺んちは豆腐屋だ  
から、豆腐を持ってくるよ」。すると主催者がピシヤリ、「ダメです。作るのは  
私たちで、皆さんは食べる人ですよ」。これでみんな、シュンとなった。

■私たちが担い手で、相手が受け手、ということを徹底させようというわけだ。  
しかし参加者はそんなことに構わず、当事者の側からの発想を持ち出す。この  
動きを思い切り強めていけば、変えていけるかもしれない。

### (2)多様な障害の人が集められるとニーズと資源が結合

■公営住宅で、さまざまな要介護者や障害者が、まぜこぜに入居しているケー

スがある。各部署の勝手な都合で、どこへも措置できない人を、みんなこの住宅に入居させてしまうのだ。そこで彼等の人間関係を調べてみたら、知的障害のある青年が、隣室の要介護の女性の世話で、仕事をもらっていたりした。

■異なったハンディを抱えた人たちが1つの住宅に入れられたために、それぞれが必要とする部分と、提供できる部分がうまくドッキングして、結果的に福祉が行われることになった。

■そういう意味では、例えば寝たきりの人たちだけを集めた老人ホームは、一見合理的のように見えるが、結局は同じ要援護者ばかりなので、資源とニーズが結び付くことができない。全員が対象者の位置に置かれる。ただ一方的にサービスを受ける立場になるというのは、担い手から見ればサービスしやすいし、受け手も喜んでいるのではと、勝手に考えてしまうが、これは全くの間違いだ。

### **(3)まとめられたおかげで、サービスの空白に置かれた！**

■介護予防教室が開かれているが、ここには要介護度がついていない人しか参加できない。その町に、要支援の人向けの同種の教室などがあればいいのだが、それがないので、特定の集団に分けられた人は何もしてもらえないというおかしなことになっている。

■要介護度で分けたのはいいが、それでまとめられたグループのいずれかがサービスの空白に置かれるのだ。

■別に、分けたり、まとめたりしたわけではないが、今の敬老会は結果的にそうしたことと同じ状態になっている。一般の敬老会は、市の公会堂などで開く

が、そこに要介護者が来ることはない。老人ホームに入所している人のためには、施設内で敬老会が開かれているケースもある。

■先日、山口県の和木町で、町内会が開く敬老会に、これから特別養護老人ホームに入所する要介護5の人が、ケアマネジャーなどの後押しで参加した。他の参加者は一瞬驚いたが、その後は皆が代わる代わる車椅子を押してあげたりして、交流を楽しんだ。要介護5の人にも敬老されるという、本来行われるべき福祉を実現したことで、他の参加者にもかなりの教育効果があったのではないか。

#### (4)集めるよりも個々の事情に応じ個別に対応すればいい

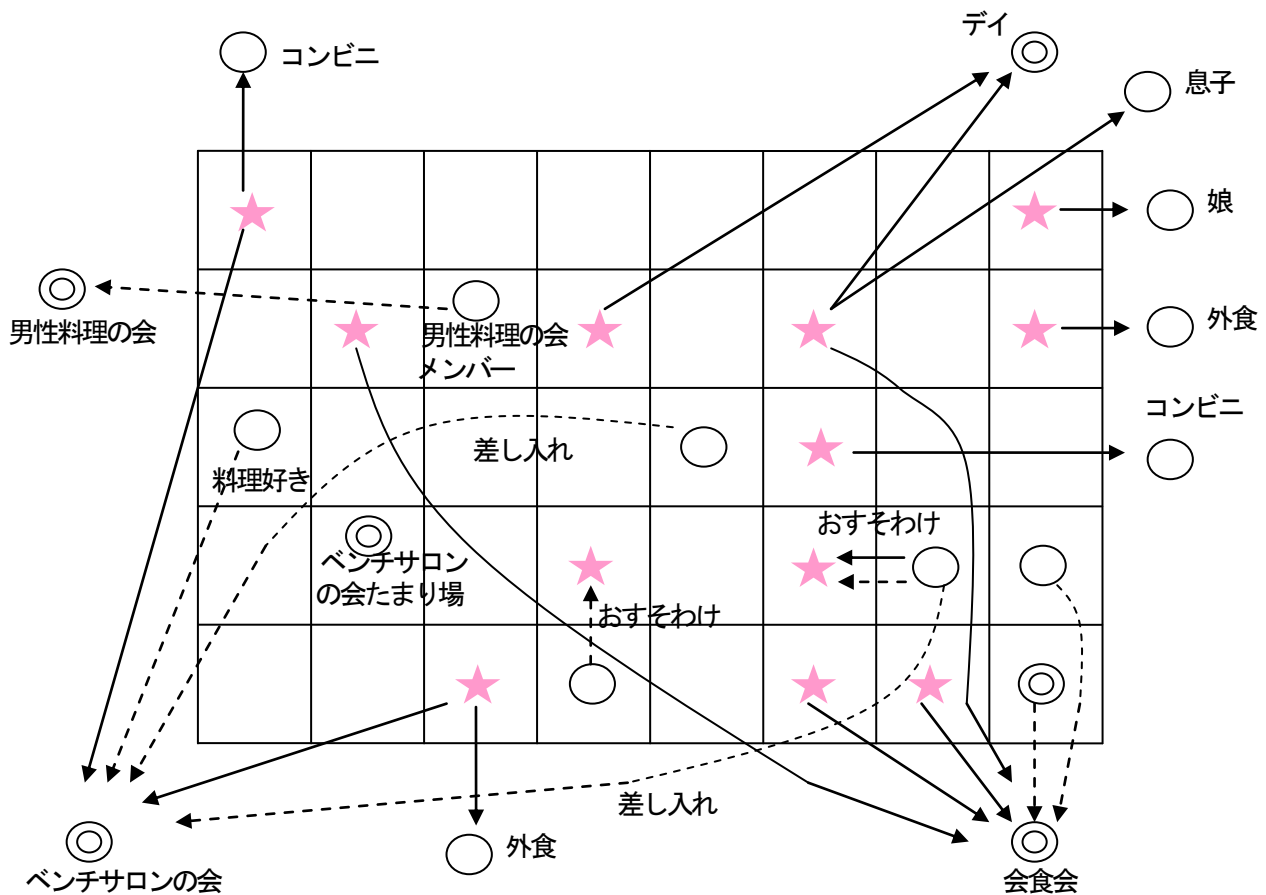
■今の福祉活動は、大抵は対象者を集めることがほとんどだ。集めることにあまりこだわらず、もっと地域の実情を生かして柔軟に考えたらどうか。

■例えば、次の団地で食関連の福祉資源を探したら、おすそわけをする人、井戸端会議に差し入れをする人、男性料理の会のメンバー、料理好きの人、会食会を開く人など、全部で10名もいた。一方で要援護者は12名だ。この12名をまとめたり、集めるのではなく、それぞれの個人的事情を勘案して、個別に解決していったらどうか。ご近所内の要援護者と担い手を個別に調整すれば、何とか対応できるのではないか。

■会食会を外でやっているが、これを団地内で開く。ベンチサロンにも差し入れが行われているが、ここに加わってもいい。おすそ分けをしている人が複数いるので、それも生かせないか。要するにまとめたり、集めたりするのではな

く、生活の中で行われるようにするということだ。

■これをするには、ご覧のようにマップを作って、個々の人の行動や、その関係を丁寧に調べる必要がある。



### (5) サービスですっきりする代わりに失われるもの

■ある団地で、隣室の一人暮らし高齢者のゴミ出しをしてあげていた人が、突然、「もう結構です」と言われた。調べてみたら、市がゴミ出しサービスを始めたということであった。なんだ、そういうことならと、その人の活動は終了となった。

こういう議論が全国で行われている。やはり有力なのが、行政サービスにし

てしまえばいいという考え方で、市民からそういう圧力がかかるケースもある。

■たしかに、行政サービスにしてしまえばすっきりする。しかし今まで助け合いとして隣人がゴミ出しの手伝いをしていたことは、何の意味もなかったのか。お隣に頼めば、お礼が必要だし、お返しもしなければならない。面倒だが、それによって繋がりが継続する。この繋がりが継続していれば、いざ災害があった時などに助けてもらえるかもしれない、まさに命の綱になる。

担い手から見たら、ゴミ出しついでに安否の確認もできる。他のことでも、できることが出てくるかもしれない。そう考えたら、ゴミ出しのつながりは極めて重要な「糸」なのだ。

■絆というのは、ただつながっていればできるというものでなく、助け合いが実践されている中で生まれるものなのだ。おすそ分けとお返しでもいいから、それがあるうちは繋がりが続く。一方的なサービスにしてしまうということは、そういう絆が生まれる機会をなくしてしまうことなのだ。

## (6)十把ひとからげにしないために個々の作業を個別化

■十把ひとからげのサービスにしないためには、どうすればいいのか。当たり前のことだが、当事者のニーズはみんな違う。だから、それぞれの個人的なニーズをしっかり受け止めますという姿勢ならば、もともと十把ひとからげにはならないはずなのだ。

■例えば子ども食堂で、一律に同じ食べ物を提供するのでもいいが、子どものアレルギーや好き嫌いの問題には対応できない。そういうことも考えに入れて、



例えば、いくつかの総菜を用意して、それぞれの母子とボランティアがチームとなり、それぞれの好きな料理を作るようにしたらどうなのか。

## (7)まとめられるだけ、助け合いの可能性が狭まる

■担い手と受け手を峻別したら、受け手はただサービスを受けるだけの存在になってしまう。これで尊厳を守るのはむずかしい。私だって担い手になりたいという欲求も受け入れてもらえない。同じようにして、特定の問題を抱えた人だけでまとめられると、それだけ本人が果たせる役割が少なくなる。助け合いが生まれる可能性も少なくなる。皆をバラバラにして、個別に交流させれば、誰でも担い手にも受け手にもなれるのだ。

■十把ひとからげのサービスは、当事者を、1人ひとり異なったニーズを持つ人間として扱っていないのではと言われても仕方がない。担い手がニーズをつくるというのは、当事者にニーズを聞くのではなく、自分たちでニーズを考えてしまうことだ。住民も、福祉活動をするとなると、サロンか子ども食堂になっている。

## 3.受け手の願いをサービスや活動に盛り込ませる法

■今の事業や活動は、担い手主導で企画されたものばかりだから、そこに当事者

側の主張を盛り込んでもらうのは難しい。それでも方法があるとすれば、それはどういうものなのか。とにかく、少しでも相手側の事業の中に食い込まなければ、当事者の主張は取り上げられない。

	当事者の主張を盛り込ませる法	その具体策
①	なるべく非公式の事業を狙う	町内会館で行う町内会主催の事業となると、担い手と受け手を区分けしたり、対象者が意見を言う機会は設けてもらえない。
②	非公式な場を選ぶ	例えば誰かの自宅で実施するイベントとなると、主客転倒も構わないし、どんな飛び入りがあってもいい。
③	決まり等にこだわらない当事者が加わる	その人が、言いたいことをはっきり言ったり、行動したりすれば、案外受け入れられる。
④	当事者が主催者側に加わる	どんな役でもいいから、主催者の側に名を連ねられれば、そこからできることがある。
⑤	初めから自分が主催者になる	これが一番いい。これなら当事者の言いたいこと、やりたいことが何でもできる。

⑥	主催者でなく企画に参加する	企画会議やその分科会の中の 1 つにでも加わればそこで主張を通すことができる。
⑦	対象者からの声を聞いてもらう	とりあえず本人が声を出す場があるというのもいい。
⑧	事業の一部を担わせてもらう	その事業の一部だけど、ともかくそこに自分の主張を盛り込ませることができる。

## 〈第3章〉

# 当事者の尊厳を傷つけない6つの方法

■福祉というのは、要援護の人に必要なサービスを提供しようということだろう。それがいけないはずはないのだから、残念ながらその行為が要援護者の尊厳を傷つけるのだ。

■ではどうすればいいというのか。サービスはいただくが、それが、例えば表面からは見えないようにしてくれれば、誇りは傷つかない。また、いただいたサービスが、普通のレベルよりもはるかに上だったら、やはり傷つかない。そういうあの手この手のテクニックを集めてみれば、案外あるものなのだ。今までは福祉関係者は、そういうことに全く神経を使ってこなかった。サービスを提供すれば相手は喜ぶはずだと単純に考えていたからだ。

# 1.担い手と受け手の区分けをやめる

■福祉関係者は、まず担い手と受け手を区分けすることから始めるが、当事者からすれば、これこそが当人の誇りを傷つけている。

■ご近所の助け合いでは、どちらが担い手だなどという区分けはしないのが常識なのだ。それぞれが担い手にも受け手にもなりたい。ならば、そうさせてあげればいいではないか。

## (1)助け手全員の悪口を言う一人暮らし高齢者。なぜ？

■次のマップをご覧ください。小規模多機能ホームが、1人の利用者の周辺マップを作ったものだ。一人暮らしで認知症の女性にこれだけの支え手がいた。

■ところがこの女性（Aさん）、これら10人の善意の人たちの悪口を言っている。AさんにはBさんの悪口を、BさんにはCさんの悪口をと。腹は立つが、相手が認知症なのだからと皆、大目に見ている。

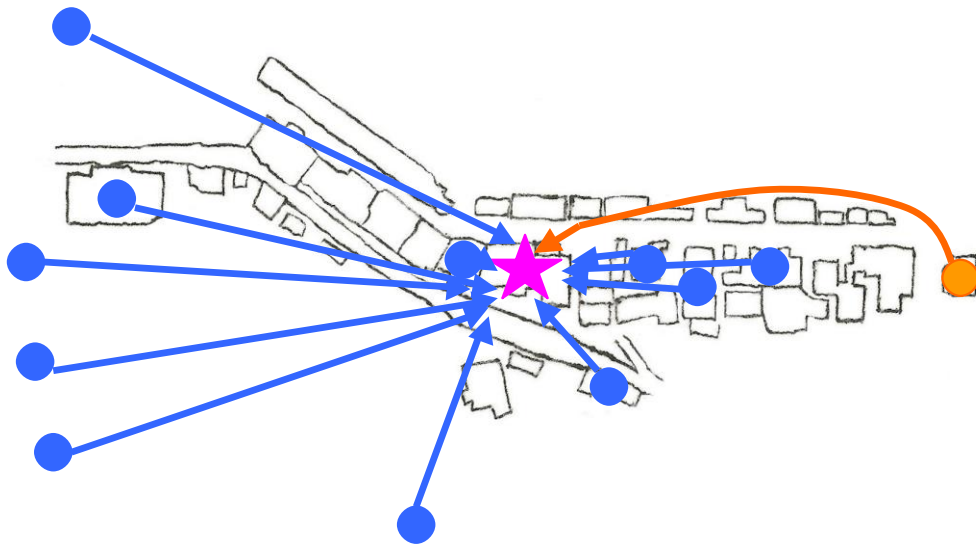
■興味深いことに、Aさんが絶対に悪口を言わない相手が1人見つかった（●印）。この人は、他の人たち（●印）がAさんの家へ持ってくるおすそわけの品物を持ち帰っていた。Aさんを買物に連れ出し、代金はいつもAさんに払わせている。ところがAさんは、「あの人はかわいそうな人なのよ」とかばっている。「私が面倒をみてあげているのだ」ということである。

## (2)要介護度の高い人ほどボランティア・チャンスを提供

■人には「心の貸借対照表」があって、左右（貸し借り）の均衡が偏らないよ

うにしている。Aさんのように（11人もの人から助けられて）負債が多いと、プライドの危機になる。そこで少しでもバランスを取り戻すべく、この黄色い人を大事にするのだ。

■いくら要介護だといっても、サービスを受ける一方では困る。そういう人には、担い手になれる機会を作ってあげなければならない。要介護度の高い人ほどボランティア・チャンスを提供すべきなのだ。



■話を発展させると、福祉サービスというものが広く行われているが、それでサービスを受ける人の貸借対照表はどうなっているのか、と考えなければいけないのではないか。

■あるデイサービスに勤務の職員が、利用者の愚痴を聞いてしまった。「毎日毎日、『すまん』と言うのにくたびれたよ」。これはまずいと考えた職員は、自分の赤ちゃんを連れて来て、利用者にお世話をお願いしたのだ。利用者は喜んで、赤ちゃんの世話をした。以降も、所長の了解を得て、赤ちゃんを連れて出

勤しているという。「あなたはちゃんと料金を払っているんだから、気にすることはないのよ」と利用者に言ってもダメなのだ。

### (3)負債が増えすぎると対照表を捨てる

■では、お返しをする機会がない、あるいはお返しをするものがない場合はどうなるのか。負債は増える一方で、破産状態だ。こうなると本人は、そのままでは苦しいから、自分の心の貸借対照表を捨ててしまうのではないか。それはどういうことなのか。プライド、誇りを捨ててしまうということではないか。まだ対照表を持って、今日は負債が増えた、などと言っている間はいいが、破産状態になると、自分のプライドを守りようがなくなるので、対照表を捨てるしかなくなるのだ。

■特別養護老人ホームの入所者は今、そんな状態になっているのではないか。こうなったら、職員は貸借対照表で対象者の状況を点検しながら、これからの関わり方を選択しなければならなくなる。「この人は、貸借対照表の負債が大きいのので、少しボランティアをやらせてもらおうか」などと考えるのだ。

### (4)デイサービスの利用者をスタッフに

■サービスの現場で、担い手と受け手がきれいに分けられて、一方はサービスをする側、もう一方はサービスを受ける側と決められているのは、どう評価すべきなのか。貸借対照表はどうなっているのか。入所する時に対照表は持たされない、または対照表は取り上げられてしまうということかもしれない。

■では、もし、担い手と受け手の区分けをせず、両者の自由なやり取りに任せるとしたらどうなるだろうか。あるデイサービスセンターが面白い試みをした。若年性認知症の男性で、他の利用者の世話を焼いている人がいた。この人をスタッフに取り立てたのである。利用者の気持ちがわかるスタッフということで、そういう意味の役割も果たしてもらおうと所長は考えた。そして、いずれ認知症が進行していけば、その時は再び利用者に戻ってもらう。スタッフと利用者との間を自由に往還できる状態にしたのには、大きな意味がありそうだ。

## (5)担い手と受け手の役割分担をやめてみたら？

■制度上の福祉サービスの場合は、そんなに融通が利かないだろうが、少なくとも民間の活動グループならできるのではないか。つまり組織の中で担い手と受け手に区分けしないのだ。それぞれが自由に、どちらの役をやってもいい。

■そうすると、各自が自分用の貸借対照表を携帯しながら、今日は私は何をしようかしら、受け手になってみるか、たまには担い手になってみるかと考える。

■例えば、助けてもらうというのは、負債が増える部分かもしれないが、その時に相手にやりやすい助け方を教えたりすれば、その部分は資本の方に入る。

■考えてみれば、担い手と受け手の活動にはっきり分けるのは案外難しいことかもしれない。両者の働きは複雑に入り組んでいて、あれかこれかに区分けできないものなのだ。

■そうすると益々、受け手と担い手を分けることに意味がなくなっていく。

## (6)「サービス」「ボランティア」を、「助け合い」に一本化



■福祉関係者が使い慣れてきた言葉の中の、サービスの一方通行を意味する言葉をすべて廃止し、これからは相互性を意味する言葉に代えていくのだ。

■その場合、「助け合い」というのは、たしかに都合がいい。いわゆる助け合いという意味もあるが、それだけでなく、担い手と受け手という区分けをつくらない—それぞれがその場その場で、担い手の役割を果たしたり、受け手の役割を果たす。そして全体として、誰もが担い手の役も受け手の役も果たす、という意味にも使えるからだ。あるのは総合点で、担い手の部分が何点、受け手の部分が何点あった、というだけだ。

## 2.要援護者をこそ担い手に

■このことは欧米では、ほとんど当たり前のこととなっている。ヘルパーセラピーという言葉もある。人のために行動すれば、自身に治療効果があるということだ。

■イギリスでは、数千人もの受刑者を国内のさまざまな高齢者施設に派遣している。以前、私からその話を聞いた参議院議員の1人が、この制度を日本にも導入する気はないか、と当時の首相にぶつけたことがある。その時の答弁は、「ご趣旨はもつともですが、監視の方をどうするか」だった。

■それから数十年がたった最近、交通刑務所で受刑者に介護犬の養成をさせている。これが受刑者本人にもたらす治療効果は相当なものらしい。

(1)担い手になれば結果として本人に治療効果が

■貸借対照表をプラスマイナスゼロにしておきたいということにつながるのだが、要援護者は、できれば資本を増やすことができればいいと思っている。要援護であるほど負債が大きいので、出る限り資本を増やすことができると考えるわけだ。

■そこで、担い手になりたいという欲求にどう答えるかを考えてみたい。要援護者が担い手になれば、結果として本人に治療効果も生まれる。だから、本人も半分意識的に、担い手になることを願うのだろう。アメリカでは、ヘルパーセラピーと言っている。

## (2)寝たきりの人がボランティア。その後にあったこと

■埼玉県福祉系の大学で教える先生が、学生向けの福祉実習で、寝たきりの人にボランティアをお願いした。入浴実習のモデルになってもらうのだ。

■その後、その先生から、彼が亡くなったという連絡が来た。送られてきた写真は、いわゆる遺影だ。普通、遺影と言えば1人で写っている写真だが、彼の



場合は、入浴実習の学生たちに囲まれた笑顔の写真だった。「父は寝たきりになっても、このとおりボランティア活動をしていました」と、家族は誇らしく説明したのではないかと。

## (3)認知症の女性が、踊りの先生になったら、変わった！

■ある地区でマップ作りをしていたら、引きこもり気味の家族が見つかった。母親は認知症で、2人の娘が介護している。2人とも看護師だから、介護の方は大丈夫だろう。ただ、窓には目張りがしてあり、引きこもっているようだ。

■どうしたらこの家を開かせることができるか、思案したが、名案が出てこない。その時、彼女は以前、何をしていたのかと聞いたら、踊りの先生をしていたという。生徒もたくさんいたらしい。ならば、もう一度踊りの講習会を開いたらどうかとなった。

■ダメもとで娘さんに掛け合ったら、意外なことに承知してくれた。その後はトントン拍子に話が進んで、実際に10名ほどの受講生を相手に立派に講師役をこなしたのである。

■普通ならこれでまた引きこもってしまうところだが、彼女の場合は違った。その後、町の主催でイベントがある時に、踊りもメニューに含まれると知ると、積極的に参加するようになった。

■状況を聞くと、やはり、「人に教える」ということが良かったらしい。これで自信がついたのだ。

#### (4)不妊症の治療に失敗。そこで不妊症のカウンセラーに

■夫婦で不妊治療をしていたが、なかなか効果が出てこない。しかし、そう簡単にはあきらめられない。何度もチャレンジしたが、それでも結果が出ない。悩んだ末に、この治療をあきらめて、不妊症のカウンセラーになったという人がいた。

■大阪の池田小学校の事件で子どもを失った母親が、その後、何を始めたか。同じ仲間のカウンセラー役を長期間にわたって担っていた。このように人は、自身がある問題で苦しんでいる時に、その問題に詳しい立場を生かして、他の人の手助けをしようとする。これが自然なことなのだ。

■アメリカでは、どうしても飲酒をやめられない人に対して、他のやめられない人に「やめろ」と意見する役をさせる。すると、意見をした方が、やめることができるという。タバコも同じだ。

■日本人は、「自分の頭の手も追えないくせに」という言い方をするが、これは間違いであった。自分の頭の手を追えない時は、その手はちょっと脇に置いて、他の人の手を追うのだ。すると、いつの間にか自分の頭の手もなくなる。

## (5)サービスを嫌がる人には、ボランティアの肩書をつける

■同じように、そのサービスを嫌がる人を無理やり受給者にするのではなく、ボランティアという位置づけにすればいいのだ。デイサービスボランティア、施設ボランティアという位置づけにしてあげる。

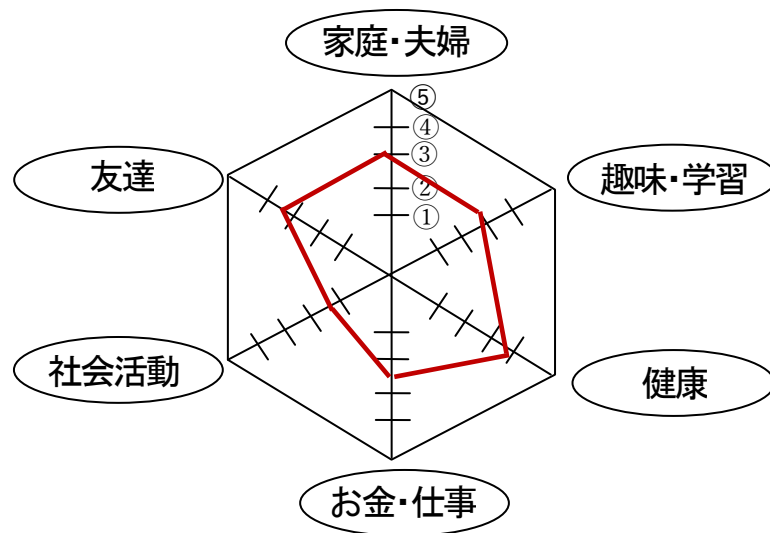
## (6)既に何かやっていないかを探す

■特別養護老人ホームの寝たきりの人にだって、できることはある。そのヒントを掴むために、いま対象者がボランティアらしきことをやっていないか、調べるのだ。ある施設で、職員に思い当たることはないかと聞いたら、そう言えばと、こんな事例を紹介してくれた。

■ある女性の部屋を通ると、彼女が部屋の外の長椅子に座っていて、「そこに座りなさい」と言われる。今度は「うつぶせになって」。マッサージをしてくれるのだという。言われるままにされると、「気持ちよくなっただろう。またやってあげるね」。彼女なりに、担い手になりたがっていたのだ。

## (7)まず本人の豊かさダイヤグラムを作らせる

■ただこちらがやってもらいたい活動を提示するかわりに、本人の豊かさダイヤグラムから、どんな活動をしたらいいかを割り出してもいい。



■そこで、1人ひとりの豊かさダイヤグラムを作る。6つの項目の1つ1つについて充足度を測り、それを結べば、その人の現在の豊かさ状況ということになる。

■問題は「社会活動」だ。これを充足させるには、どうしたらいいのか。「おむつたたみの手伝い」といった、こちらが提示したものだけでなく、ダイヤグラ

ムから割り出されたその人らしい活動もあるといい。その時に使える発想の1つが、その人のマイナスだと思われている特性を生かすというものだ。

### 3.「障害」を「能力」に転換したら？

■日本人は、その人が障害を持っていたり、病気だと分かると、途端に「何もできない人」と見てしまう。人が障害や病気を隠す理由の1つだ。そこで、障害を持っていても、できることがあるというのは、極めて重要なポイントになる。

■そんな時に、新しい発想がこの世界で生まれてきた。障害特性は、じつは能力でもあったというのである。これこそ本人の尊厳を取り戻せる最高の発想ではないか。

■天井の小さなシミが気になるのは、自閉症の青年の障害の特性だ。ところが、この特性はその利用の仕方によって変わってしまう。彼はその障害ゆえに、印刷所の仕事に採用されたのである。ちょっとした印刷ミスを瞬時に見つける特殊技能者としてだ。紙の裏表を見分けるのも大事な仕事だが、彼はそれも瞬時に見つけてしまう。

#### (1)イスラエル軍に精鋭の自閉症部隊

■イスラエル軍の「インテリジェンス・ユニット」(情報部隊・右の写真)で、情報活動に携わる自閉症スペ

(BBCニュース映像)



クトラムの若者たちが話題になっている。「軍にとっては、彼等の優れた映像思考能力や細部へのこだわりが、航空写真のアナリストという高度に専門的な任務において資産になっている」と米国のアトランティック誌は伝えている。

■彼らは毎日送られてくる航空写真を見比べながら変化を察知し、軍に伝達している。これでたくさんの兵士を救ったということだ。普通の人にとっては細かすぎて集中力が続かない困難な作業だが、彼らはそれをこそ得意としており、「まるで趣味のように、とてもリラックスできる仕事」だと言っている。

## (2)社会が障害者の行動に価値・能力を見出せるか

■この「能力」については、2つの視点を理解する必要がある。まず1つ目は、障害者1人ひとりについて、その人独特の能力を発見できるかということだ。

■企業の社会貢献セミナーで、事例発表者として招待された某企業の知的障害者向け授産施設の長が、余談として「面白い知的障害の青年がいる」と言い出した。その青年の挨拶の仕方に物凄い魅力があって、施設を訪れた客は、その挨拶に出会うと、メロメロになってしまうほどだという。

■たまたまそのセミナーの席に都内の百貨店の社会貢献担当者が数名いたので、私は尋ねてみた。「この知的障害の青年を、挨拶という仕事だけで雇用する気があるか？」と。すると彼らはヒソヒソ話し合い、結果を1人が発表した。「雇います」と。

■そうなる、その人が障害者になるか、才人になるかは、社会のその人に対する見方や関わり方次第ということになる。未だに大部分の人が「障害者」と

見られているということは、社会が彼らの能力を開発し、活用できていないということに他ならない。

### (3)生かせる対象が見つければ、能力になる

■先ほどの天井のシミの話だが、その特性が生かせる対象が見つければ、そのまま能力に変質する。

■こだわりの強い自閉症の人が、豆腐の薄切りの技術で名人と言われている。細部が気になり、同じことを繰り返しても飽きないという特性を生かして、コンピュータソフトのテスターを請け負っている自閉症の人たちもいる。自閉症の子を持つ、デンマーク最大の通信会社の社員だった男性が会社を立ち上げ、その技術の確かさから、マイクロソフトやオラクルといった大企業を顧客として獲得し、世界中に広げている。

## 4.サービスを水面下に隠してしまえ

■または、サービスを受けているという事実を水面下に隠してしまえばいい。住民は普段、「これから〇〇さん宅に行くけど、これは友愛訪問だからね」などと家族に言うだろうか。ましてやその言葉を、訪問する相手に言ってしまったらどうなるか。人間の営みを、これは〇〇の活動、これは福祉活動だなどと分けないのが常識なのだ。



## (1) 銭湯で他人の服を畳む認知症の女性。本人にはデイ？

■知人が銭湯に行った。湯船に浸かってゆったりとした気分になっていたが、ふと脱衣場を見ると、私の服を畳んでいる女性がいます。慌てて脱衣場に戻ったら、番台のおばさんに呼び止められました。「この人は最近、認知症になって、毎日こうやって、人の服を畳みに来るのよ。これをすると気が休まるみたいなの。だからみんな畳ませてあげているのよ。あなたもそうしなさいよ」と。銭湯が、この女性にとってのデイサービスセンターになっていた。番台のおばさんが所長だ。

■人はこのように、自分にとって必要な問題を意識し、それに見合ったサービスを考え、それを自前で実践しているのではないか。この場合はデイサービスに相当する。しかしサービスであることは、誰の目にも見えない。自己サービスだからますます見えない。

## (2) 1人ひとりのデイサービスがあった

■いま紹介した銭湯の話だが、当の認知症の人は、関係機関によってデイサービスに行くよう指導される。これが専門分化の結果である。しかし本人は、自分の問題をどのように解決したいのか。銭湯に行ってみみんなの服を畳むことで、心が安らぐのだ。

■都内のマージャン店に「賭けない麻雀の会」ができていているという。ここに高齢者が沢山参加している。地域のサロンに参加している人も多い。これらはすべて、本人からすればデイサービスの役割を果たしているのだ。

### (3)カルチャーの内容ならカルチャーセンターに任せよう

■新聞にこんな記事があった。「利用したくなるデイサービス」。一体どんなデイなのか、読んでみると、要するにお楽しみの対象を選べるということらしい。陶芸とか歌とか折り紙とか。記事の最後に記者はこう書いていた。「まるでカルチャーセンターのようだ」。

■記者はいい所に気づいた。しかしここまで気づいたのなら、もう一歩進めるべきであった。「それなら、本物のカルチャーセンターが受け入れればいいではないか」と。おそらく本人はそう願っているはずなのだ。カルチャーの仕事は本来、福祉機関ではなく、カルチャーセンターのものである。そこに専門分化の弊害が出ているのだ。福祉の専門家は、利用者がそれぞれ選んだメニューを、それぞれの専門の機関や企業が受け入れてくれるよう働きかければいい。そしてカルチャーセンターへの送迎をしたり、介助人をセンターにも配置するなどの配慮をするのだ。ところが、なんとカルチャーセンターのお株を奪ってしまった。

### (4)ガンのリハビリならセンターより合唱グループ

■知人が喉頭がんの手術を受けた後、自宅に復帰。これからどこでどんなリハビリをしようという時に、彼女は公民館のコーラスグループを選んだ。

■公民館にはこんな情報が流通しているらしい。〇〇の病気になった人のリハビリは〇〇グループがいいとか。公民館は、利用者にとってはリハビリセンタ

一だったのだ。ならば本物のリハビリセンターに行けばいいではないかと言いたいだろうが、住民はそうは考えない。福祉の匂いのしない公民館のグループがいい。そこにリハビリセンターが専門の立場からアドバイスをすればいいのだ。

## (5)「福祉は陰に隠れてほしい」

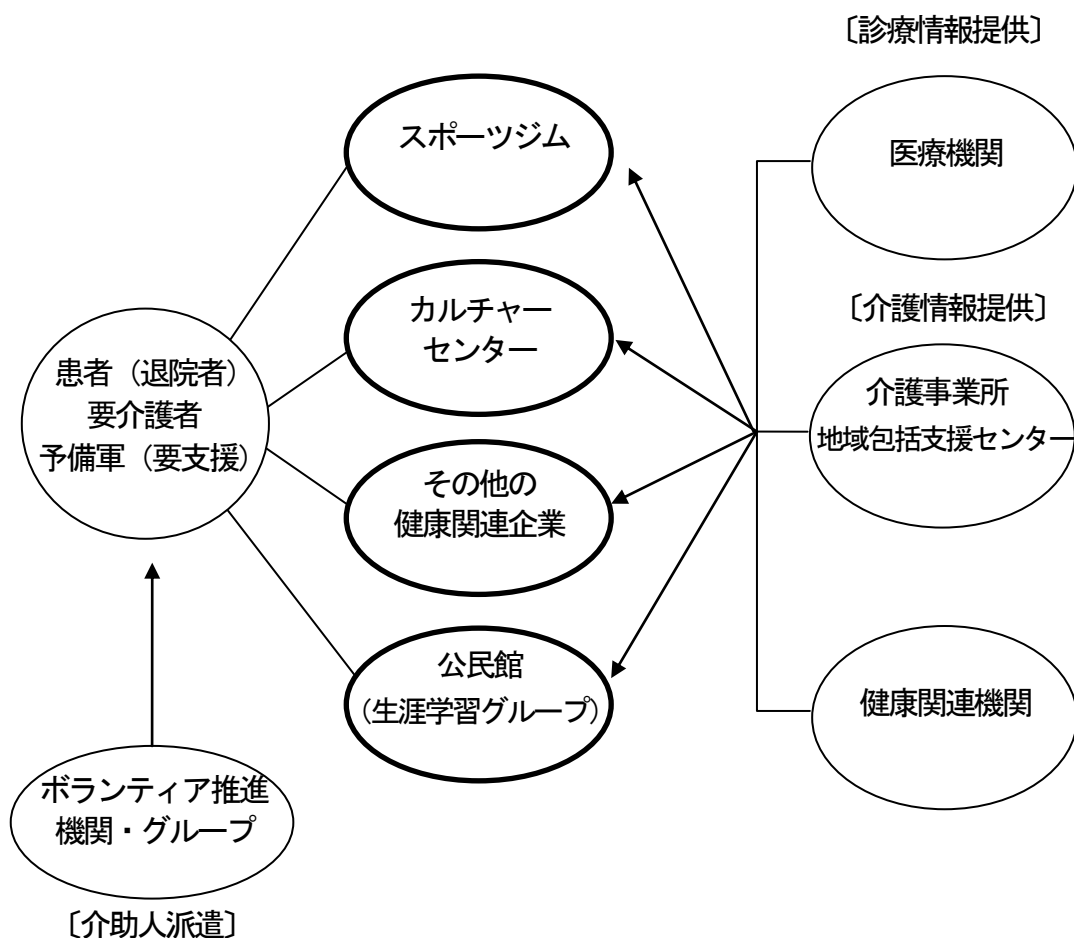
■先ほどの銭湯で服を畳んでいる女性自身は、これで福祉サービスを受けているという自覚がない。それがいいのだ。人間は、人に助けられているというのを、ミエミエの場でやられるのは嫌なのだ。そういうことは水面下でやってほしい。福祉は隠し味であれと住民は言っている。

■だからこういうサービスをする専門機関が前面に出て、いかにも福祉サービスですよとやられるのはかなわないのだ。福祉は陰に隠れてほしい、と当事者は願っている。本人はただ生活をしている。その1コマが、機能的にはデイサービスであるにすぎない。

## (6)やるべき所がやるべき事を

■カルチャーセンターが、デイ利用者を受け入れるということだが、これを広げるとどうなるか。福祉の営みの他に社会にはいろいろな営みがある。様々な企業があり、公民館や消防署などの公共機関があり、学校があり、各種のグループがある。その他にも家庭生活が営まれているし、ご近所活動もある。それらの営みの中に福祉という営みが隠されている、というのが理想なのだ。

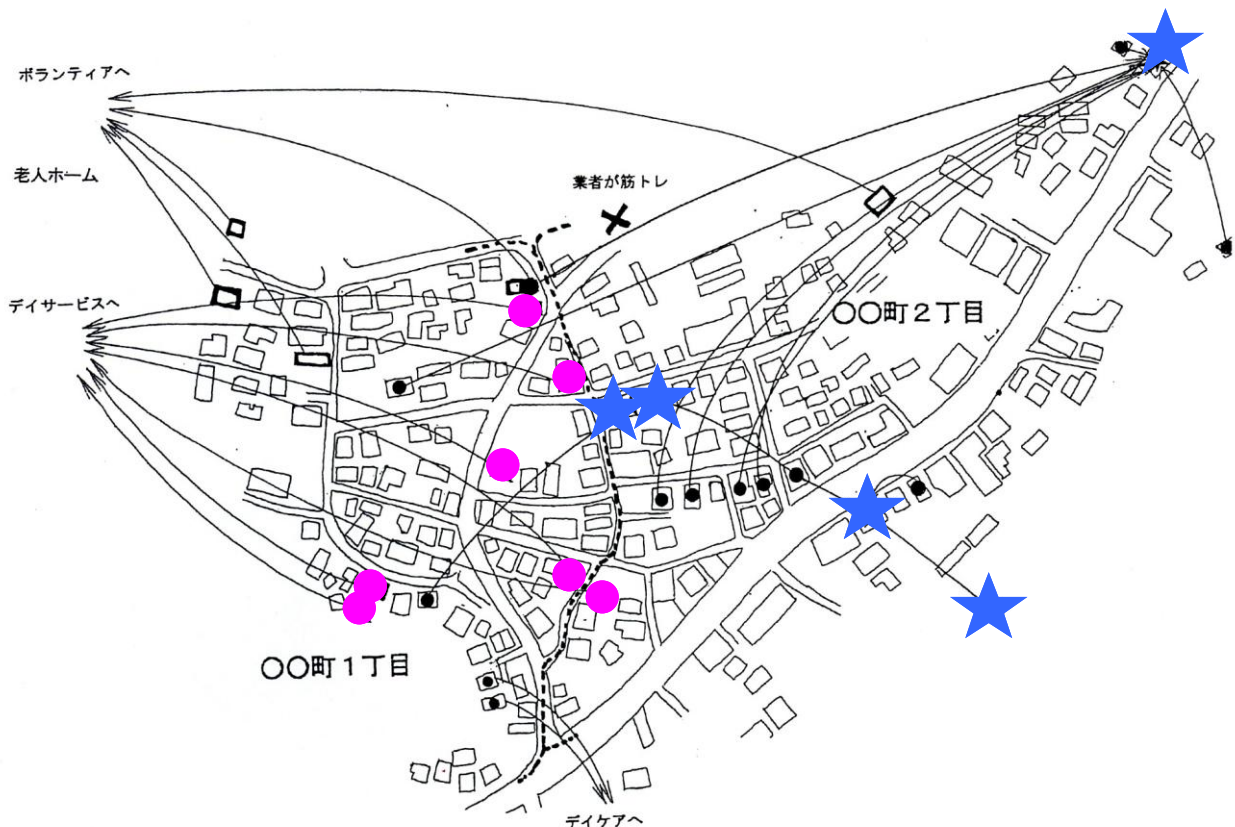
■言い換えれば、それぞれが「福祉」を自分たちの生活や業務の一部に取り込むということだ。カルチャーセンターや銭湯が、その業務中に、依頼された範囲で「福祉」にも少し関わるのである。当事者に見込まれた所、つまり「やるべき」所が「やるべき」事をすればいい。福祉機関は、自分たちでやっつけてしまわないで、それぞれの「やるべき」所に「やるべき」事をやらせていく。その仕掛け人的な専門性の発揮ならいいのだ。



■次のマップを見ていただきたい。真ん中に縦の点線が走っていて、その左側が1丁目、右側が2丁目である。よく見ると、この町内の左方向に施設があって、そこでデイサービスが行われている。そのデイサービスを利用しているのは、大部分、1丁目の人である。この2つの地区は、ただ1本の道路で分けられているだけで、地域の特徴としては、ほとんど同じだろう。なのになぜデイサービスの利用者が1丁目に偏っているのか。

■じつは、ここは沖縄県である。沖縄県では、あちこちで「ゆんたく」が開かれている。井戸端会議だ。店があれば、その店の前で、道路に縁石があれば、そこに腰かけて「ゆんたく」が行われている。

■調べてみると、2丁目では「ゆんたく」があちこちで開かれていた。ところが1丁目ではほとんどやっていない。1丁目でも2丁目と同じようなことができたはずだが、その代わりにデイサービスの方に行ってしまった。



## 5.並みより遙かに高いサービスを

■1つ実験してみたらどうか。デイサービスを運営している人なら、送迎用の車を、特に誕生日の人のために、リムジンなどの超高級車にしてみるのだ。持ち主から1日だけ借り受け、何人かの付き人つきで運転してみる。その時の、本人や他の利用者、それに職員、全員の反応を聞いてみる。私があれこれ説明するより、よほど理解が早いだろう。関係者は、福祉は並みより若干下でいいと内心は考えているだろうが、その真逆のやり方がじつは正解なのだ。

■アメリカから始まった、余命が限られている子どもたちを招待して、望むことは何でも実現しますというサービスがある。ある子どもは望み通り、ディズニーランドに招かれ、行列なしでアトラクションを楽しみ、朝はミッキーマウスが「おはよう」を言いに来る。その結果、重度の障害を持つその子が起き上がってしまった。

福祉というのは、本来はとてつもなく高いレベルのサービスでなければいけないのだと、納得した。そしてそのサービスが実現すると、とてつもない効果が出てくるのだ。

### (1)他の人より上のレベルか、または違った道を選ぶか

■この写真を見ていただきたい。火炎放射器付き車椅子。ほぼすべての地形に対応できる車輪を装備。座席は海洋レスキュー隊のヘリのもので、4.5mの炎を発射することができる。



(GREATHOUSE Labs より)

開発したランス・グレイトハウスさんは、兄がパーキンソン病になった時、「見るからに医療器具そのまま」の車椅子ばかりであることに疑問を抱き、「普通の男たちが羨むほどカッコいい」車椅子に乗せようと決心した。

■弱者は2つの道のどちらかを選ぶようだ。1つは、他の普通の人よりも、上のレベルを選ぶ。もう1つは、他の普通の人とは違う道を選ぶ。この火炎放射器付き車椅子は、2つの道を同時に進もうとした。

## (2)住民を反対派から応援団に逆転させた超高級福祉の店

■「福祉の店」が開店するというニュースが新聞に載っていた。障害者が働いている店という意味だろう。そのとき私たちは、その店に一定のイメージを描くが、同じ「福祉の店」でもこんな店ならどうだろう。

■京都府舞鶴市の高級フレンチ・レストラン「ほのぼの屋」。スタッフは統合失調症や知的障害、難病などを抱える人だが、「予約のとれない店」として人気を博し、年間50組のウェディングも手掛け、最近では「一泊ディナー付きで1人2万円以上」のプチホテルも始めるなど、「福祉の店」の常識とイメージを覆す発展を遂げている。

■建設前は地元住民の反発が強かったが、いざ完成した店で住民をもてなしたところ、一番反対していた男性がこう言ったそうだ。「こんなええもんができるんやったら、わし、反対せんかったのに！」（「ノーマネット」公開の西澤心さん（同店支配人）の講演録より）。地域の人にとってこの店は「誇り」になっており、海水浴客にも「高台におしゃれなフランス料理の店がありますよ」と教

えているそうだ。

### (3)超一流のシェフやホテルのインストラクターを動員

■これだけ高いレベルの福祉をだれがどうやって実現させるのか。「普通」の人材と努力では駄目だ。舞鶴の店を実現させたのは、「支配人」である西澤心さんの並外れた情熱とパワー。舞鶴湾を一望できる一等地に、2億5千万円の建物、そしてグルメファンに名を知られた超一流のシェフを揃えた。従業員を指導したのはホテルの接客インストラクターだ。投入した人材等もまた「普通をはるかに超えたレベル」であった。

### (4)福祉とは弱者と強者の戦いだ

■しかし、と読者は言うかもしれない。要援護者を手厚く扱うのはいいとして、「普通よりも遥かに高いレベルの福祉」を提供するのは、ちょっとやりすぎではないか。「普通程度」でいいではないかと。そんな高い福祉を提供しなければならぬのにどんな合理的な理由があるのか、というのだ。

■人間は、善意やサービスを受ける立場に置かれた時、屈辱感を味わう。プライドの高い人ほど、味わう屈辱感は強烈だ。そのとき「担い手よりも下位の位置に置かれた」と感じる。そんな弱者が心休まるのは、ある種の仕掛けで、普通の人よりも「高い位置」についたと実感できた時である。

また、障害のある人が「並以下」の資源を与えられて、健常者と社会で対等にたたかえるだろうか。本当の福祉を実現するために必要なのは、普通よりも



遥かに高いレベルの資源なのだ。

## (5)超高質の資源を「ふんだくってくる」人が本当の味方

■ところが私たち(福祉関係者も含めて)は、対象者が、自分たちよりも高い位置に上ることを快く思っていない。こうなると、福祉というのは、強者と弱者の戦いと見た方がいいかもしれない。社会から超高級な資源を「ふんだくってくる」人が彼らの本当の味方なのである。

■そんな味方(庇護者)の支援を得て、弱者が強者に戦いを挑んでいくのが、福祉という現象だと言い換えることもできる。だから担い手主導の福祉とは、強者の側から作る福祉と言い直してもいい。

■故・宮城まり子さんが肢体不自由児養護施設の園長として実行したのが、まさに庇護者の行動である。子どもたちが描く絵はプロ顔負けの素晴らしい作品だったが、それもそのはずで、超一流の画家を指導者に招いたのだ。また、超一流のダンサーも指導者として招き、子どもたちはブロードウェイでダンスを披露して喝さいを浴びた。弱者の庇護者の資格は、超一流の資源を確保できることである。その人たちによってはじめて「普通よりも遥かに高いレベルの福祉」が実現するのだ。

## 6.ハンディの分、ハンディをつけて

■障害などのハンディを負わされた人に、ハンディの分だけ、ハンディをつけ

てほしいということである。ゴルフをしている人は、このことを良く理解しているが、しかしこれが福祉の世界で使われると、わからなくなるらしい。

■障害者が作業所で作った菓子が、品質が良い割に安い値段で売られていることに驚いた「パレスホテル大宮」のシェフが、ホテル主催の菓子コンテストを開き、優秀な作品にはホテル推奨の称号を贈り、ホテル内で販売もした。また、特に優秀な若者をホテルでパティシエとして雇用した。

こういうことをすることで、ようやく障害者が作る菓子が、一般の菓子と肩を並べることができる。「下駄を履かせる」と私は言っている。高下駄を履かせて、健常者の背丈に並ばせるのがフェアネスである。

## (1)日本人は平等が好き

■柔道が国際競技になったら階級制が導入された。つまり100キロの人と50キロの人を闘わせるのはアンフェアというわけだ。途端に日本の柔道界は落胆してしまった。それでもと彼らが死守したのが無差別級であった。ここで姿三四郎が登場するだろうと期待したが、残念ながら1人も現れなかった。やはり体重の重い人に押しつぶされてしまった。同じようにして、もし相撲が国際競技になったら、また重量制が導入されるだろう。

■日本人が期待しているのは、100キロの力士が200キロの力士を投げ飛ばす姿なのだろう。しかし100キロの人の立場から考えると、やはり残酷と見られるはずだ。

■日本人は「フェア」な扱いよりも、「平等」な扱いが好きなのだ。だから10

0キロと200キロを、何のハンディキャップもつけずに闘わせる。そういう意味では、日本人には福祉というものはわからないのかもしれない。

## 〈第4章〉

# 尊厳を守る福祉を、当事者主導で実現させる法

■ここに当事者の尊厳を守る法を羅列したが、それを担い手側が実行してくれることを期待するのではなく、受け手側が工夫を凝らして実現をめざす必要がある。

	当事者の尊厳を守る法	具体策
①	担い手と受け手の区分けをやめて！	自分が果たせる役割を見つけて、担い手の役割を実行していこう。なんだ、これでいいじゃないかと担い手が理解できるように。「私はこういうことができる」と担い手に提案するのもいい。
②	要援護者をこそ担い手に	要援護者、特に自尊心の高い人は、ただ受け手に甘んじることはしない。何かしたがついてるし、既に何かしているはずだから、どん

		<p>なに小さなことでもいいから、それを探そう。</p> <p>周りの人が気づかせてあげるのもいい。「あなた、もうやっているじゃない」と。</p> <p>また、悩める人は、他の悩める人の相談に乗りたいものだ。そのチャンスを探そう。</p>
③	「障害」を「能力」に転換したら？	<p>これは自分でそれに気づくのは難しい。大抵の場合、企業関係者が、職場で、障害者の意外な能力に気づく。</p>
④	サービスを水面下に隠してしまえ	<p>これも気づきの能力が必要だ。デイサービスを利用している人たちが、利用しない日に何をしているのかを調べたら、ある地域ではみんな畑仕事をしていた。これが彼らにとってのデイサービスだと見て、支援すればいい。</p>
⑤	「サービス」から「助け合い」へ	<p>有償サービスを無償の助け合いに切り替える努力をしているコーディネーターがいるが、かなりの能力が必要だ。それより、受給者が積極的に、お返しをするなりして、助け合いに事実上転換してしまえばいい。それに担い手が呼応するかも問われる。</p>
⑥	並みより遙かに高いサービスを	<p>これも有能な企業関係者などの協力が不可欠だ。当事者からそういう有能者に協力を求め</p>

		にいくという手もある。
⑦	ハンディの分だけ、ハンディをつけてほしい	日本という国の風土が「平等好き」で、フェアネスという感覚が分からないので、その点では難しい。郵便に第三種以外の障害者用の種別を創設するよう障害者団体が運動したことがある。手足の不自由な人にとって、郵便の重要性は、健常者とは異なるという論理で、この制度を勝ち取った。正攻法というのもあるのだ。